

第8号

札幌響くらぶ

発行／札幌響くらぶ
 (財)札幌交響楽団内
 札幌市中央区中島公園1番15号
 (札幌コンサートホール内)
 電話 011-520-1771
 F A X 011-520-1772

第1回札幌響くらぶコンサート開催!!

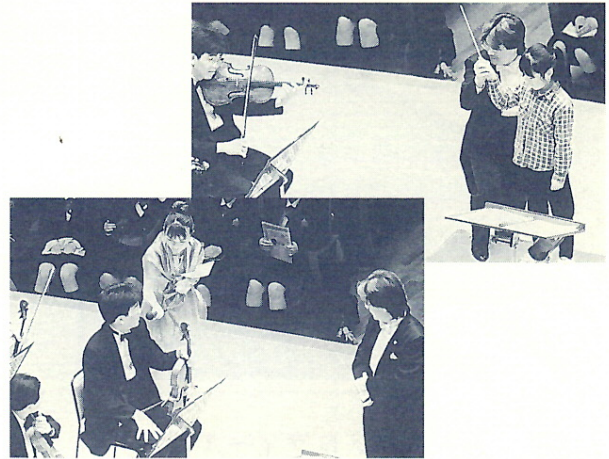
「札幌響と遊ぼう」を楽しんだ90分



98年度札幌響くらぶの最大事業「札幌響くらぶコンサート」は、多くの会員の方々の理解と協力を得て、去る4月17日約1400人の聴衆を集め、キタラ大ホールで開催されました。

「軽騎兵」序曲で華やかに開幕。コンサートは、会員の竹津宜男さんと、ボランティアで出演して下さったu h bアナウンサー丸岡いずみさんの司会進行で、なごやかにすすめられました。

第一部は、誰でも一度は聴いたことがある名曲を札幌響で堪能。第二部は「札幌響と遊ぼう」で、会場から指揮希望者を募り、キタラで札幌響を指揮する醍醐味を味わっていただきました。選ばれたのは小学校2年生の女の子と男子高校生、そして大人の男性お一人。みなさん「一生の思い出」と感激。記念に札幌



響から、この日の指揮者渡邊一正さんのサイン入り指揮棒が贈られました。

また、「アリとキリギリス」は、進行役の丸岡さんが、聴衆や楽員にインタビューして、キリギリスの運命を決めるという変わった曲。会員の皆様にもきっとお楽しみいただけたことでしょう。

札幌響のリスナーを増やしていこう、という札幌響くらぶの活動目標は、札幌響のチケットを知り合いに販売する実践活動の中で、札幌響を共に聴くことの喜びを感じ合うことによって、実現可能となると思います。大方の会員の皆様方のご協力に、心から感謝を申し上げます。

(札幌響くらぶコンサート実行委員長 上田文雄)

指揮者と語る

広島交響楽団正指揮者

わたなべ
渡邊 一正さん

わたなべ かずまさ

キタラは初めて
楽しみです!!



渡邊一正さんのプロフィール

1966年東京生まれ。幼少からピアノを学び、8歳で東フィルと共演。国内でピアノにより各種の賞を受賞し、桐朋学園大学進学。ピアノ、作曲、指揮を学ぶ。ドイツ留学を経て、東京フィルハーモニー交響楽団で国内指揮者デビュー。指揮者として、そして卓越したピアニストとして高い評価を得る。国内の主要なオーケストラに客演し、現在、広島交響楽団正指揮者、東京フィルハーモニー交響楽団指揮者を兼任。いま、日本で最も注目されている若手指揮者。

竹津宜男さんのプロフィール

札幌の創立メンバーで、ホルン奏者として活躍。札幌事務局長を経て、現在、PMFオペレーティング・ディレクター。「札幌名曲シリーズ」の解説者として好評を得ているのはご存知の通り。今回の札幌くらぶコンサートでも司会・解説を担当。また、札幌の「生き字引」として、本誌に「札幌物語」を連載中。

1999年4月16日、第1回札幌くらぶコンサートの前日、キタラの楽屋で、指揮者の渡邊一正さんと司会の竹津宜男さんに対談をしていただきました。今回は「指揮者と語る」をおとどけます。

竹津 はじめまして、竹津宜男と申します。この度は札幌くらぶコンサートでお世話になります。私は司会をさせていただきますのでよろしく願いいたします。

札幌くらぶと申しますのは、会員の私達がサポーターになって札幌の定期会員を増やそうという運動組織です。とりあえずの目標は札幌コンサートホールKitaraでの札幌定期演奏会を連続2日持てることです。明日は皆さんにもっと札幌に親しんでいただこうというわけです。よろしく願いいたします。

渡邊 よろしく願いいたします。

竹津 プロフィールを拝見しますと、渡邊さんはピアニストとして8歳でデビューしていらっしゃるんですね。

渡邊 NHKで、東京フィルハーモニー交響楽団と一緒にハイドンのピアノ協奏曲を演奏しました。指揮者は尾高忠明さんでした。

竹津 その時、指揮者になりたいと思われたのですか。

渡邊 勿論、その時は尾高先生に憧れましたが、それ以前に、小学校1年生の時、初めてオーケストラの演奏会を聴きにいったのが、たまたまウイーン・フィルの演奏会で、指揮はクラウディオ・アバドでした。最前列で聴きましたが、なんといっても指揮者が格好よく、指揮者になりたいと思ったのです。

竹津 指揮者になる勉強をするにあたって師事されたのは尾高先生ですね。

渡邊 それは確定的でした。共演していただいた時、幼い僕に対して優しくかつし、間近で一緒にできて、こんな指揮者になりたいと思いました。

竹津 指揮者になりたいと思われてからも、しばらくはピアニストへの道を歩んでいらっしゃるんですね。例えば、全日本学生音楽コンクールでは、小学校の部でも中学校の部でも優勝していらっしゃるし、ドイツ留学もピアノでダルムシュタット音楽アカデミーへ行かれていますね。

渡邊 とりあえず、一つの楽器を極めたかったです。ハンス・ライグラフ先生が来日された時レッスンを受けたのですが、目から鱗が落

ちたような気がして、ダルムシュタットまで行ったのです。

竹津 目から鱗が落ちたのは、音楽性ですか、それともテクニックですか。

渡邊 テクニックです。元々井口愛子先生に師事していたのですが、愛子先生が亡くなられてからは、火の玉のように、がむしゃらに弾いていたようです。ハンス・ライグラフ先生に出会い、もっと静かに穏やかに演奏するテクニックを学びました。

竹津 初めて指揮をなさったのは東フィルで、桐五重奏団の「協奏曲の夕べ」ですね。

渡邊 桐五重奏団の主宰者、ピアニストの広中孝先生も私の師匠なのですが、先生から「お前やれ」って言われてましてね。その後で、東フィルの指揮研究員になりました。

竹津 指揮者への道のりは順調だったのですか。

渡邊 一時はそうでもなくて、ちょっと、つっぱってましたので。

竹津 先生とうまくいかなくなったのですか。

渡邊 いいえ、思い込みが激しくて、仲間同士の人間関係が悪くなりかけたりしました。

竹津 指揮者になれるには、思い込みの激しさも重要な要素でしょうね。

東フィルの「名曲コンサート '93」では、モーツァルトのピアノ協奏曲を弾き振りしていらっしやいますね。大変なことをおやりになって、と聞いていましたら、定期デビューでは、ラヴェルの両手のピアノ協奏曲の弾き振りと、ストラヴィンスキの「春の祭典」と、とても信じられないほど難しいプログラムをおやりになって、これがうまくいったら怖いものなしですね。

渡邊 オーケストラは、とても緊張感のある素晴らしい演奏をしてくださいました。感謝しています。僕は指揮台に立つのが楽しくて、怖いと思ったことはないんですよ。

竹津 そうですか。西武のピッチャー松坂みたいですね。

渡邊 はい、もっとも、そんなに若くありませんが。

竹津 1995年には、東フィルの副指揮者に就任され、翌年からは広島交響楽団の正指揮者に就任されましたね。秋山和慶マエストロと一緒なのですね。

渡邊 ええ、以前から客演で通っていたのですが、正指揮者に就任しました。去年から秋山先生が来られました。

竹津 広響はいかがですか。

渡邊 一生懸命演奏してくれて、良い意味でアマチュアリズムのある気持ちの良いオーケストラです。専用の練習場が出来ました。

竹津 それは良かったですね。どの辺に出来たのですか。

渡邊 中区の平和公園の近くにアステールプラザと言うのが有るのですが、その隣に出来ました。オーケストラの練習は公開なのです。



竹津 公開って、予め申込でもするんですか。

渡邊 いいえ、例えば通りすがりの人でも良いのです。不特定多数の市民が見学すれば、練習場の利用料金がただになるらしいのです。音大生などが大勢勉強に来てくれると良いのですが、どうも、そちらは時間が合わなかったりして、難しいようです。

竹津 練習はやりづらくないですか。

渡邊 さーっと、やりますので。

竹津 ところで、札幌とはいつごろから。

渡邊 最初は1992年のバレエ「くるみ割り人形」でした。それから、もう、10回ほどやらせていただいています。北海道内で上富良野町とか幌加内町とかへ行かせていただきました。キタラは今回が初めてなので楽しみにしています。

竹津 そうですか、明日は札幌くらぶ主催公演ということで、指揮者コーナーを設けさせていただいたりとか、ご面倒をおかけしますが。

渡邊 大丈夫です。広島では、各区の演奏会で経験しておりますので。

竹津 お忙しいところを長時間、ありがとうございました。明日は、大勢が楽しみにしていますので、よろしく願いいたします。

後記：とても謙虚な方で、将来大物指揮者になる素質を持った人だと思いました。(竹津宜男)

成功の喜び 分け合って 交流会から

演奏会の終了後、キトラ3階大リハーサル室に移り、札幌団員とくらぶ会員の、打ち上げを兼ねた交流会を開きました。100人近くが参加し、ビールを片手に会話が弾み、記念写真を撮り合う姿も。団員の方から「私たちは音楽を通じ、きっと、もっと仲良くなれる」とのあいさつもあり、今後も交流を深めていこうと誓い合いました。

冒頭、上田文雄実行委員長が「札幌を盛り上げようとの思いから企画し、みんながチケットを手売りでやってきました。招待した子どもたちも喜んでくれ、本当によかったと思います」とあいさつ。乾杯の後、自由に歓談しました。

指揮者の渡邊一正さんは「みなさんの楽しそうな顔が見れて、本当によかった」。打楽器の大垣内英伸さんは「予想より、ずっと盛会で大成功だったと思



います。次はもっと準備期間をかけて、よりよいものにしたいですね」。演奏会の司会をつとめた、丸岡いずみさんは「クラシックは固いイメージがありましたが、今日は身近に感じられ、本当に楽しかった」と笑顔を見せていました。

演奏会の指揮者コーナーでタクトを振った、美唄の永田康さんは「(指揮をしようと決めていたので)とても緊張した気分で客席にいました。休憩時間に飲んだワインがよかったのかも」と満足そうでした。

札幌団員の方々とくらぶ会員が親しく話す姿もあちこちで見られました。ヴィオラの鹿島淑子さんは「こうした交流会は全国的にも珍しいこと。誇っていいと思います」。ティンパニの真貝裕司さんも「今後も、いい演奏をすることで応えていきたいので、応援して下さい」と話していました。



6回の会合で準備 コンサート実行委員会



ところで、札幌くらぶコンサート実行委員会は1月に正式に旗揚げ、上田文雄・札幌くらぶ事務局長を委員長に、約20人が6回の会合を重ね、準備を進めてきました。チケットの売れ行き状況など集計作業は週1回行ないました。

当日も、交流会の会場設営・撤収や司会、当日券売り場での販売、くらぶ入会希望者の受付や撮影など手分けして取り組みました。

(宮本 武)

札幌物語 IX

楽員会 (3)



札幌が創立して間もなく誕生した札幌楽員会は、楽団員の福利厚生を考えました。

最初に行なったのは、楽員会費から会員への無利子の貸し出しでした。任意団体で出発した札幌市民交響楽団は月給が安いいため現金買いが出来ないのに、団体として信用がないため分割払いでの購入をする方法もなかったのです。洋服や楽器の部品を買うとか、まとまった買い物が出来ないため、この一時貸し出し制度はとても人気がありました。創立当時の楽団員の平均年齢は21歳で、最年長は30歳、次は28歳、私は三番目で26歳でした。大学を出て社会人を経験した24歳以上の楽団員は黒タキシードも白タキシードも持っていましたが、大学から直接入団した楽団員や、学校の途中（以前は、腕の立つ演奏家はちゃんと学校を卒業するのを恥とした人もありました）で入団した楽団員は舞台衣装を整える必要から始まりました。

また、若さ故に、思わず月給をすっかり飲み代に使ってしまい、楽団員全員に頭を下げて、一時しのぎの借金をすることもありました。

楽器は、原則として自前です。余談になりますが、札幌の創立時には道銀から寄付をいただいて、一管編成分の楽器をオーケストラが持っていました。その幾つかは現在も使われています。ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コント

ラバスはイタリアのクレモナ産の新品でした。クレモナは、ストラディヴァリウスを始め名器の産地です。どれも赤いニスが塗ってありました。ニスは名器を名器たらしめる秘密を宿した曲者なのです。しかし、この新品のニスは夏になると融けて衣類を汚し嫌がられました。時間が経つと染み込んだり乾いたりして融けなくなったそうです。

次に、楽員会が目指したのは、楽団員の商売道具、楽器や楽器の部品、楽譜、レコードを割り引いてもらうよう楽器店と交渉することでした。そして、楽員が月賦で購入出来るよう努力することでした。

昨今のサラリーマン金融の普及や通信販売全盛時代からは想像も出来ないでしょうが、任意団体に過ぎなかった札幌市民交響楽団の楽団員はどこにも信用がなく、割賦販売会社の会員への加入を申し込むと必ず「何処の誰が保証をしてくれますか」と問い返される始末でした。

そうした中たまたま札幌信販の役員のお一人がクラシック音楽の愛好家で、この人の努力で札幌楽員会は札幌信販の会員に入れたのです。加入した楽団員は「自分が不始末をしたら皆に迷惑を掛ける」と緊張し、返済額をきちんと計算しながら利用したものでした。

(竹津宜男)

PLAYER'S TALK

札幌交響楽団 ファゴット奏者

たかはし とし
高橋 敏 さん

今年7月に定年を迎えられるそうで おめでとう
ございます 入団は何年でしたか

札幌が出来て2年目の1962年4月です。私は山口
県岩国市の出身ですが、桐朋学園で担任だった中田
一次先生に勧められ、東京で行なわれた札幌のオー
ディションを受けて入団することになりました。

特急「はつかり」に接続する深夜の青函連絡船に
ゆられて函館に着き、「おおぞら」に乗り継いで札幌
へ向かいましたが、山また山でこの先オーケストラ
があるような街が本当にあるのだろうか、と不安で
したよ。

創立2年目の札幌は中島公園の中にある児童会館
が練習場でした。当時、正団員は20人にも満たなく、
一般の職業についている準団員や学生の研究生など
からなっていましたので、練習は夜間になることが
多く、帰りはよく「すすきの」でひっかかったもの
です。夏は快適な児童会館も冬は練習が終わるころ
にやっとストーブのそばのバケツの氷が溶けるほど
でした。

長い演奏活動で特に記憶に残ることは

寒い練習場でリハーサル、その日の内のテレビス
タジオでの録画どりはつらかったですね。当時は白
黒からカラーになったばかりで、スタジオ内の温度
を35度位に上げないと色が出なかったそうで、管楽
器は室温によってピッチが変化しますから、大変で
した。演奏旅行で思い出に残っていることの一つで
すが、1969年の8月、殆ど40度の猛暑の九州旅行の
後、北見に行きましたら、町の食堂ではストーブが
燃えていて、店の人に「むこうは暖かいんでしょう、
羨ましいわ」と言われ返事に困ったのを覚えています。

ファゴットの魅力についてお感じのことを

日本の作曲家は特にファゴットのひょうきんな面
を誇張しますが、私はそのようには感じてい



ません。私は今、シューベルトの歌曲をファゴット
で演奏することに夢中になっています。心が熱く燃
えて、とてもしあわせを感じます。そんな時、ファ
ゴットをやってよかったと思います。これからも、
練習を重ね、妻のピアノと合奏する時間も大切にし
たいと思っています。

オーケストラをより深く楽しむコツなど

音楽は聴いているだけではなかなか深く理解する
ことは難しいと思います。歌をうたったり、楽器を
奏でたりして苦勞することが結局早く理解に達する
道だと思います。札幌の演奏を聴く前にCDなどで
何度も聴いてみたり、できればスコアをみて、少し
でも音をだしてみれば、面白さが増すのではないで
しょうか。

札幌交響楽団 コントラバス奏者

さいとう まさき
斎藤 正樹 さん

今 札幌で最もお若い楽員の方だそうですが
札幌の演奏に触れながら育った世代ですね

はい、僕は根室高校のプラスバンドでコントラバ
スを受け持ったことがこの道に入るきっかけとなり
ました。根室には札幌も時々きて演奏してしました
が、あまりはつきり記憶にはないんです。音大に行
きたいと思ったとき、先生から札幌の藤澤さんに教
えていただくよう勧められて、月一度の割合で札幌
に通いました。日曜日の朝6時の汽車で根室から札
幌にむかい、午後2時に札幌に着いて、夕方6時か
ら3~4時間のレッスンを受けたあと夜行列車で帰
り、朝から学校へのきつい一年間でしたが、無事に

東京の音大（武蔵野）に受かりました。

オーケストラ生活はいかがですか

「札幌」は雲の上の存在でしたし、音大をめざしたのは先生になろうと思っていたので、



オーケストラ入団は考えになかったのです。プロになれるとは思えなかったですし。

昨年10月に札幌のオーディションを受けて入団しました。それまでの2年半をフリーで、札幌も含めて色々なオーケストラでエキストラ出演していましたので、オーケストラそのものに違和感はありませんでした。でも、エキストラと団員では全然違いますし、先生と共に演奏するのは嬉しい反面緊張もしますね。はじめはお客さまの顔がよく見えにくい、指揮者さえ見えないような上がりようでした。楽譜にかじりついて、出遅れないようにと夢中でした。少し慣れた今は、セクションの力になれるように努力をしなければ、と思っています。

入団してから札幌でお感じになることは

常任指揮者が尾高さんになって3回(11月の定期、第9とニューイヤー)の公演がありました。気合いが入りますね。僕自身も尾高さんにひばられた感じを持ちました。極端に言えば指揮者によって音楽のできあがりが変わるのかなという印象です。今回(3月定期)の指揮者は、ヨーロッパで活躍している方ですが、小さい音を大切に音づくりをする指揮者ですね。いかに小さい音を響かせられるか、コントラバスがその根底で支えていなければできないことと僕自身思っていますから、張り合いを感じます。

これからの目標がありましたら

音楽の本場に留学するチャンスがあれば、好奇心をもって学び、腕を磨いてみたいと思っています。

from 「札幌くらぶ」

札幌をこよなく愛するファンが集まり、札幌応援団、つまり「札幌くらぶ」ができたのは、1996年12月21日のことでした。まだコンサートホールは建設中でしたが、このホールを拠点にして、札幌が世界に向け発信することを願い、少ない応援団でしたが、情熱がみなぎっていました。この会報の創刊号は97年1月につくられました。

楽団員の方々との交流も少しずつ進んできたとき、念願のコンサートホールがオープン、私たちは札幌によるこけら落としに酔いしれました。97年7月のことでした。

2年半の間に、数回の交流会を開き、会報も今回で8号になりました。多くのスタッフの方々協力を受けて、少しずつ輪が広がっております。会員はまだ350人に過ぎません。でも熱い

心のファンの方々ばかりです。

これから「札幌くらぶ」として、やってみたいことは沢山あります。一番大切なことは、演奏する楽団員の方々的心や考えを知る機会、つまり交流の場を色々なかたちでつくることと考えております。また、楽団員の方々にも、ファンがどのような希望や期待を持っているかを知ってもらいたいと思います。

舞台の上の演奏者と客席の聴衆が一体となって心が通いあうときに、はじめて本当の感動と満足感が双方に生まれるのではないのでしょうか。小さな「人の和と輪」を急がずに着実に広げてゆきたいと思います。

6月5日(土)に「札幌くらぶ」総会を行う予定です。皆様のご意見をお聞かせ頂きたい、ぜひお越し下さい。(山科俊郎)

FAN NETWORK

「はじめての札幌」 —うちの母の場合—

ちょっと古い話だが、一年程前のある日のこと、「札幌、聴いてきたんだよ」と母から電話があった。それは、郷土出身の作曲家先生自らが指揮する映画音楽を中心とした（「用心棒」とか）ご当地限定ともいべき演奏会だった。わが母が管弦楽とは珍しいこともあるもんだ……と思ったら「券、もらったんだよ」。いやいや、きっかけは何でもいいんだよ。チケットを貰おうが拾おうが、整理券が当たったとか、音がするからのぞいてみたらTシャツとジーパン姿の人たちが広場のステージの上で「カルメン」やってたとか……そういうきっかけで初めて札幌を聴いたって人も少なくないだろう。うちの母の場合もそうだ。もしその券が手元に無かったら、行く予定も無かったらしい。で、どうだったときいてみると、「良かったよ〜。でも、若い人たちもいっぱいいるのにねえ、あの人たちが生まれるずっと前の映画の曲だったのに、さすがプロだわぁ」……そりゃプロですから。百年、二百年前の曲だってやっていますから……。

電話の後、ふと私は考えた。自分にとっての初めての札幌は何だったろう。「田園」？「新世界」？シベリウスの2番？……いや、もっと前だ。そうあれは二十年も前のこと、あの時も皆さんTシャツにジーパンだった。クラシックの名曲も何曲か聴いたはずなのに、記憶に残っているのは「宇宙戦艦ヤマト」。うーん、なつかしい……！

後日談。その後、母はミニコンポなる物を購入した。いったい何を聴いているのかと思ったら、J. シュトラウスのCD 1枚とか……。それにしてもすごい進歩だ。これも札幌のおかげかもしれない。

「こっちじゃあんまりいいのが売ってなくてね」というわけで、誰でも聴きそうなクラシックのCDを何枚か選んで送ってみた。その中に、札幌のCD

も入れてやったのは、言うまでもない。

(江別市 K・K)

札幌へのお願い

1961年に発足した札幌。人間で言えば38歳。花満開の真っ盛り！ファンの一人としてその成長を心から喜んでおります。と言いましてもまったくの素人です。

昨年死去された「黒澤明」名監督の映画「乱」を追悼番組で見ることがありました。結構疲れの残るストーリーに、札幌のラストサウンドは繊細でなめらかで、フツと疲れがとれました。

私事ですが、合唱団に入っている関係で海外でも数回歌う機会にめぐまれました。舞台袖でオーケストラの方々が満面の笑みで、頑張ろう!!とかいって、名前の交換をしたり、写真を写したりして、本番に臨みました。札幌の場合、キタラではオケと合唱団が会うことはありませんが、厚生年金会館や地方の会場では時間のずれこそあれ一緒です。嬉しくて声をかけたらひややかに無視されたとか、睨まれたとか、特に「芸森アートホール」でのオケ合わせの時など合唱団はピリピリです。どちらが良い、悪いではなく、創刊号で南区の鈴木さんも書いていますが、いかに名演奏を聴かせるオーケストラであっても、聴衆から愛される札幌を望みます。(人々とのふれあいも大切です)

ウィーンフィルのニューイヤーコンサートなどでは、「ラデツキー行進曲」で終り、というような曲札幌にもアンコールのしめの曲がほしいですね。あるのかしら？みんなが手拍子をとったり、いつの日か街なかでハミングでも出来るような曲、待っています。(大好き札幌 T)

編集後記

「札幌くらぶ」の新たなチャレンジ「札幌くらぶコンサート」が行なわれました。この第8号は、その特集といたしました。

・コンサートの実現のため、裏方として苦勞された実行委員の皆様のご協力で、コンサートへの取り組みから実施、そして交流会までの詳報

をお届けできました。お礼申し上げます。

本号は4月発行予定でしたが、この特集のため5月発行となりました。ご了承下さい。次号は計画通り7月発行で準備しております。

6月5日は、年に一度の総会です。多くの方々のご出席を願っております。(佐藤良次)

次号の「札幌くらぶ」は7月発行の予定です。